

平成26年 1月

西村直子 学位論文審査要旨

主 査 吉 岡 伸 一
副主査 萩 野 浩
同 花 木 啓 一

主論文

Psychosocial profiles of children with achondroplasia in terms of their short stature-related stress: a nationwide survey in Japan

(低身長ストレスからみた軟骨無形成症小児の心理社会的側面：日本での全国調査)

(著者：西村直子、花木啓一)

平成26年 Journal of Clinical Nursing 掲載予定

参考論文

1. 低身長児が自分の身長に抱くイメージと心理社会的適応の関連：対面式イメージ身長評価法を用いて

(著者：西村直子、遠藤有里、南前恵子、木村真司、高梨都、堀川玲子、田中敏章、有阪治、神崎晋、花木啓一)

平成23年 日本成長学会雑誌 17巻 33頁～40頁

学 位 論 文 要 旨

Psychosocial profiles of children with achondroplasia in terms of their short stature-related stress: a nationwide survey in Japan

(低身長ストレスからみた軟骨無形成症小児の心理社会的側面：日本での全国調査)

軟骨無形成症は、低身長と四肢短縮を特徴とする先天性疾患である。軟骨無形成症児(者)は、その著しい低身長によって、日常生活で様々なストレスを受けていると考えられる。しかし、そのストレスにどのように対応し適応しているのか、どのような周囲のサポートが有効なのかを検討した研究は少ない。本研究では、ラザルスらによるストレス反応モデルを援用した概念枠組みを用いた。つまり、「個人は身長に関連したストレスや学校生活におけるストレス【ストレッサー】を受けると、まずそれらが脅威であるか、コントロール可能かという認知的な評価とそれに引き続くコーピング【コーピングプロセス】を行い、心理社会的・身体的に適応していく【適応状況】。セルフエフィカシーやソーシャルサポートは認知的評価やコーピングを調節する【コーピング調節因子】。」というものである。軟骨無形成症児(者)の心理社会的指標や心理的適応過程を評価するために、1) ストレッサー(低身長に関する経験、学業ストレス)、2) コーピングプロセス(認知的評価、コーピング)、3) コーピング調節因子(セルフエフィカシー、ソーシャルサポート)、4) 適応指標(自己概念、ストレス反応)の4つのドメインからなる質問紙群を作成し、軟骨無形成症児(者)に見られるストレスへの適応プロセスの特徴について解析した。

方 法

全国患者家族会に属する8～18歳の軟骨無形成症の小児130名とその保護者を対象とした。患児への質問紙により、低身長に関する経験(TACQOL-SSを改変)、学業ストレス、ストレス認知(認知的評価尺度)、コーピング(コーピング尺度)、セルフエフィカシー(セルフエフィカシー尺度)、ソーシャルサポート、自己概念(改訂自己知覚尺度)、ストレス反応を評価した。各尺度の素点を健常小児集団でのSDスコアに換算した。保護者には小児の基本的属性(生年月、身長、体重、成長ホルモン療法の有無、骨延長術の有無、患児より背の高い年下の兄弟の有無)と不安・心配について回答を求めた。回収数は78名で、有効回答数は73名(男30名、女43名)であった。対象者の平均年齢は13.1±2.8であった。基本的属性に男女差はなかった。

結 果

軟骨無形成症児（者）は、ストレッサーとして低身長に関連した経験を正常身長群より頻繁に経験し（+1.3 SD）、なかでも日常生活の不便さを多く経験していた（+3.9 SD）。低身長ストレスを強く感じていたにも関わらず、コーピングプロセスであるストレスの認知的評価では、影響性評価、コントロール性評価ともに正常身長群と同様であり、最終的な心理社会的適応の指標である自己概念スコアやストレス反応スコアも同様であった。興味深いことに、軟骨無形成症児（者）では、コーピング調節因子と考えられるセルフエフィカシーは+3SDと高かった。男児では、低身長に関連した経験として「子供とのかかわり」を挙げており、より脅威であると感じていた。その一方で、男児ではコーピング・ソーシャルサポートのスコアが高かった。年齢別では、中学生の学業ストレスが小学生・高校生と比較して高く、自己概念のスコアが低かった。

変数同士の相関については、低身長に関連した経験は、自己概念やストレス反応に強い相関がみられた。コーピングプロセスの認知的評価の指標は、心理社会的適応の指標と強い関連を示した。セルフエフィカシーは、コーピング以外の心理社会的な変数と強い相関があった。身長やその他の属性は心理社会的指標とは関連を示さなかった。

考 察

軟骨無形成症児（者）は、低身長に関連した経験に頻繁に遭遇していたが、自己概念などの適応指標は保たれていた。また、低身長ストレスへの認知的評価も正常群と同様であった。この結果から、低身長ストレスが強くても、適切な認知的評価でそれを緩和し、良好な心理社会的適応に至る可能性が示唆された。セルフエフィカシーが高値で、多くの変数と強く相関したことは、軟骨無形成症児（者）の心理社会的適応における重要な役割を示唆する。

結 論

軟骨無形成症児（者）は低身長ストレスを多く経験していたが、適応指標である自己概念は障害されず、さらに、低身長ストレスが強いにもかかわらず「脅威」を感じていないという特徴的な認知的評価をしており、自己効力感が非常に高かった。本症では、認知的評価と自己効力感が心理社会的適応を促進する要因となることが示唆された。軟骨無形成症児（者）の心理社会的適応の評価には「心理的適応プロセス」全体を評価することが重要であり、その結果に応じた介入の実施が心理的適応をサポートする上で有効であると考えられた。